

はじめに

◎島根県域における大規模な「戦い」 (ただし文献史料の残された時代以降)

- ①南北朝動乱 出雲国・石見国の各所で戦乱
- ②応仁・文明の乱
- ③1530～33年 尼子経久と塩冶興久の戦争 出雲国内・備後北部を巻き込む戦乱
- ④1542～43年 周防国大内氏の出雲国侵攻と敗走
- ⑤1556～1562年 安芸国毛利氏の拡大による石見国おける戦争
- ⑥1562～1566年 安芸国毛利氏の出雲国侵攻と尼子氏滅亡
- ⑦1569～1571年 尼子氏再興戦と敗北
- ⑧1866年 幕長戦争石州口の戦いと長州藩による石見支配

=島根県の歴史全体からみても、戦国時代は明らかに例外的で、非常に激しい戦乱の時代
⇒なぜ、このような現象が起こったのだろうか？

◎中国地方の戦国時代 (通説的な描かれ方) =島根地域もその重要な舞台として描かれる

16世紀初期から 大内氏と尼子氏の二大勢力が領国をめぐる抗争を展開 (※)

安芸国毛利氏など両者の狭間に位置した諸領主が翻弄される

1523年 鏡山合戦 尼子経久が大内氏分国東側最大の拠点を攻略

1525年 毛利氏が大内方に復帰

以後、大内氏・毛利氏と尼子氏による戦争の時代 (※)

1540～1541年 郡山合戦 尼子氏が大敗北

1542～1543年 大内氏の出雲国遠征失敗

1551年 陶隆房の挙兵 大内義隆自害

1554年 防芸引分 毛利氏が大内氏に敵対

1555年 厳島合戦 毛利氏が陶晴賢を討つ 毛利氏が「戦国大名化」

1557年 大内氏滅亡

1566年 尼子氏滅亡

1576～1580年 毛利・織田戦争

→※16c初期の尼子氏を、大内氏と相拮抗する大勢力とみるのは、後世の軍記物の表現

※1529～1539年の大内氏と尼子氏は、敵対関係にあったとは言えない

絶えず対立し戦争を継続していたとみるのも、後世の軍記物の表現

=毛利氏の拡大の歴史を描く『陰徳太平記』の影響が大きい

⇒ただし、こうした各所の戦乱を、領土拡大をみざす戦国大名同士の激突と見るだけでは、なぜこの時代だけが、これだけ顕著な戦乱の時代となったのか、理解できないのではないか？

⇒もっと広い視野で考えてみる必要があるのではないか？

I 将軍家の分裂と西日本の諸勢力

◎明応の政変 明応2(1493)

幕府管領細川政元が日野富子や伊勢貞宗・貞陸父子と共謀し、足利義植を廃し、
足利義澄（堀越公方足利政知の遺児、義暹・義高）を将軍に擁立

→足利義植（義材・義尹） 越中に逃れた後、明応8(1499)に山口へ下向
＝将軍家の分裂（将軍足利義澄 vs 前将軍足利義植）

→ その影響が最も顕著に現れたのが九州と中国地方

◎足利義植と大内義興が御内書・副状等を遣わした諸勢力

〈明応9(1500)前後〉

肥前国の渋川尹繁、豊前国の佐田泰景、肥後国の阿蘇惟長・相楽為統・相良長每
南九州の入院重聡・菱刈重時・新納忠武・禰寝重清・島津豊州家忠朝・伊東尹祐、
安芸国の平賀弘保・毛利弘元、石見国の益田宗兼・小笠原氏、但馬国の垣屋氏

〈永正5(1508)〉

山名氏一族、京極氏一族（京極政経・尼子経久・宍道兵部少輔）
但馬国の垣屋氏・大田垣氏・田結庄氏・田公氏・八木氏・塩冶氏・佐々木氏、
伯耆国の片山氏・進氏・藤氏・赤木氏・赤尾氏、
出雲国の多賀氏・広田氏・朝山氏・神西氏・田儀氏、
石見国の佐波氏・吉見氏・益田氏・三隅氏・周布氏

◎足利義澄と細川政元が御内書・副状等を遣わした諸勢力

大友親治・大内高弘・少弐資元・武田元信・山名中務少輔
対馬国の宗材盛・宗義盛（盛順）、筑前国の麻生氏、肥前国の有馬氏、
肥後国の阿蘇惟長・菊池能運・相良長每、南九州の島津忠昌・伊東尹祐、
伊予国の河野通宣、安芸国の毛利氏・小早川氏・吉川氏・高橋氏、
石見国の益田氏・三隅氏・周布氏・福屋氏・佐波氏、備後国の江田氏、
土岐氏・浦上氏・朝倉氏（「大友家文書録」「室町家御内書案」ほか）

⇒西日本各地の諸勢力が、難しい選択を迫られ、それぞれの内部に対立の火種

毛利弘元請文案（『毛利家文書』171）

去年六月廿日 御奉書、今日到来、拝見つかまつり候、そもそも 今出川殿様（足利義尹）周防国山口御
着座、京都（足利義高）御下知に任せ、忠節いたすべきの旨、仰せ出だされ候、その旨を存知せしめ候、
更にもって無沙汰緩怠の儀あるべからず候、この旨をもって御披露あるべく候、恐惶謹言、
（明応十年） 正月十六日 治部少輔弘元
謹上 御奉行所

毛利弘元書状案（『毛利家文書』181）

九州凶徒等御退治の儀につき、御奉書を成しくだされ候、すなわち御請け申し候、よって御副状披見せし
め候、拙者の事、御屋形（大内義興）の御意に任せ、名代をもって馳走いたし候、内々御心得にあずかる
の由承り候、祝着候、いよいよ憑みたてまつり候、恐々謹言、
（文亀元年） 七月十日 弘元
杉次郎左衛門殿 御返報

安芸石見国衆御請有無人数注文（『大友家文書録』589）

御請中人数事

安芸国衆

小早川又太郎 毛利治部少輔 / 平賀蔵人大夫 吉川治部少輔 / 完戸安芸守
岩（石）見国衆

□(福)屋孫太郎 小笠原与次郎 / 都治徳松 佐波善四郎

高橋大九郎	周布左近将監	／	河上又三郎			
<u>不御請申人数事</u>						
安芸国衆						
小早川中務少輔	阿曾沼	／	天野	野間	／	鹿島 □□
岩(石)見国衆						
吉見大蔵大夫	三隅	／	益田孫次郎			
以下、						
文亀元年十一月廿四日						

II 分裂・抗争の拡大

◎大内義興の長期在京がもたらした地域の混乱

1508年 足利義尹・大内義興が上洛 = 義植政権成立

1518年 大内義興、周防国へ帰国

大内義興書状 (『益田家文書』266)

長々在洛の条、芸石衆迷惑候により、少々境津に至り下向候、内々又誘引の方候哉、然りといえども予在京の上は、堪忍あるべき御覚悟の由に候、子細論ぜず候といえども、真実の御芳志、言語に及ばず候、連々忘却あるべからず候、心緒なお弘中越後守(武長)申すべく候、恐々謹言、

永正八年辛未

(1511)

十二月廿三日

(宗兼)
益田治部少輔殿

義興(花押)

安芸国人一揆契状 (「天野毛利文書」『広島県史 古代中世資料編 V』12)

申し合わす条々

一上意より仰せ出ださるの儀に候といえども、また諸大名より仰せをこうむるの儀に候といえども、一人として才覚いたすべからず候、この衆中相談し、御事請あるべく候、よっておのおの愁訴の義候とも、同前たるべき事、

一この衆中親類・被官以下、あるいは主人を経て、あるいは勘気をこうむり、他出の時、申し合すにおいては洞許容あるべからず候、ただし、罪の軽重に依り、一端の儀は愁訴すべき事、

一衆中論所の儀につき、自然弓矢に及ぶ事候わば、おのおの申し合わせ、理非を糺し異見を加えるべく候、万一理方に背かれ候わば、衆中を放ち申すべく候、然る上は、利運方を最眞申すべき事、

一申し合わす間において、時々喧嘩出来については、相当返報をさしおき、衆中裁許を相待つべき事、

一この衆中と他方弓矢に及ぶ時、おのおの合力の事、自身の儀に候とも、名代に候とも、旨儀により同篇申し合わすべき事、この儀偽り候わば、

日本国中大小神祇、殊には、八幡大菩薩、摩利支奠天、御罰を罷りこうむるべき者也、

永正九年壬申 (1512)

三月「三日」

天野讃岐守興次(花押)

天野式部大輔元貞(花押)

毛利少輔太郎興元(花押)

平賀尾張守弘保(花押)

小早川安芸守弘平(花押)

阿曾沼近江守弘秀(花押)

高橋民部少輔元光(花押)

野間掃部頭興勝(花押)

吉川次郎三郎元経(花押)

⇒ 明らかに、将軍・大内氏から自立的な一揆契約

◎安芸武田氏・尼子氏の台頭

1523年 鏡山合戦 → 尼子氏・安芸武田氏が優勢

1524年 大内義興・義隆父子、安芸国へ出陣

→ 1525末～1526 大内氏・大友氏・山名氏が結束し優勢

1528年 大内氏安芸国撤兵 大内義興死去

◎将軍家の分裂がもたらした各地の分裂・抗争

・南九州「三州大乱」 守護島津奥州家の弱体化

- ・肥後菊池氏・阿蘇氏・相良氏の家督争奪
- ・対馬の錯乱状況
- ・細川・山名・赤松氏分国の混乱
- ・尼子氏と塩冶氏の戦争（1530年）

=1500～1530年 内部の分裂、対立軸の拡散が、広範囲に展開

その原因は少なくとも14世紀の南北朝動乱以来の各地の対立・抗争が重要な背景
しかしそれが一挙に促進・拡大されたのは、将軍家の分裂を契機とする、全領域的な大小諸勢力の内部分裂・抗争の激化によるものと考えられる。

Ⅲ 広域的連携の形成と大内氏・尼子氏の戦争

◎大内氏・大友氏の戦争と尼子氏の飛躍的拡大

1529 後半～1530 初頭 大内氏と尼子氏・安芸武田氏が停戦合意

1532～35年 大内義隆・菊池義武と大友義鑑・少弐資元の全面戦争

大内氏による大内氏与党勢力形成の主体的働きかけ

1536年 大内義隆が大宰大弐に任官 この頃より再び大友義鑑と結束

1538年～ 尼子氏の軍事行動が急速に広域化

山名氏・赤松氏分国への侵攻 畿内への侵攻 安芸・備後への侵攻

大坂本願寺との交信 細川氏綱・畠山植長らとの連携

=尼子氏は、反大内方諸勢力の受け皿としての役割を果たすことにより、

広範囲の諸勢力との連携が可能となり、軍事行動の範囲が飛躍的に拡大

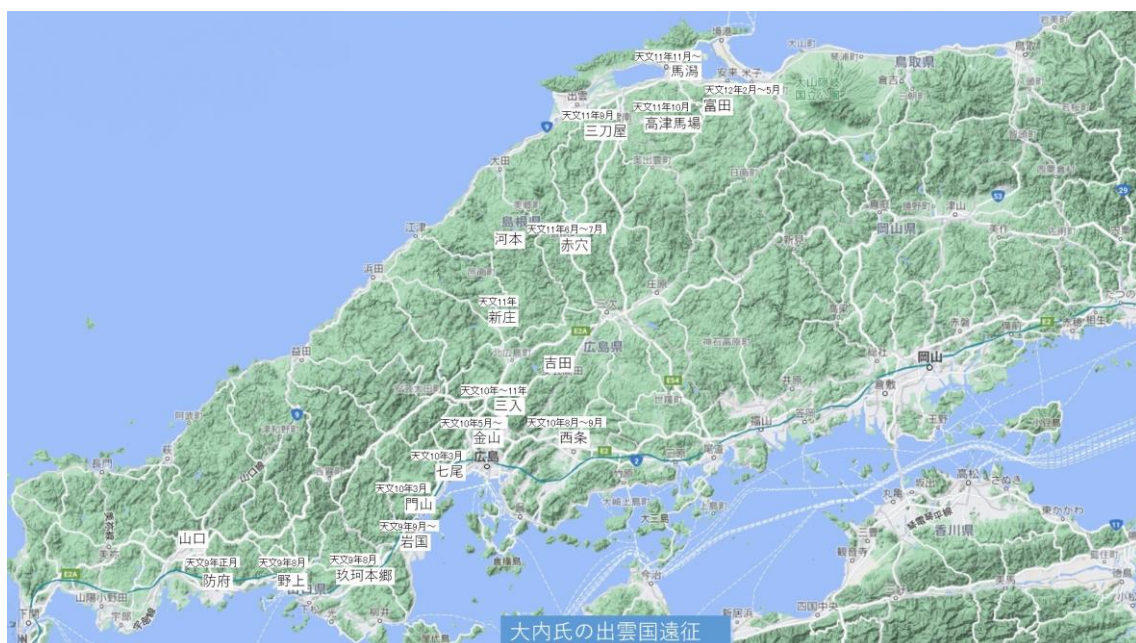
⇒長らく分国東側の混乱（尼子氏の拡大など）に対応しなかった大内義隆も、

ようやく重い腰を上げざるを得ない情勢となってきた

◎大内義隆の出雲国遠征

※山田貴司「大内義隆の『雲州敗軍』とその影響」（黒嶋敏編 2019）

1540年（天文9）正月 大内義隆が山口を進発



- 1540年(天文9)9月 尼子詮久の軍勢が、安芸国吉田へ襲来(郡山合戦の開始)
- 1541年(天文10)正月 尼子詮久が吉田から敗走(郡山合戦の終結)
- 4月 大内氏が桜尾城を攻略、友田興藤切腹(「房頭覚書」)
- 5月 安芸武田氏の滅亡
- 1542年(天文11)7月 赤穴落城(関43出羽80)、小笠原氏降る(「房頭覚書」)
- 9月 大根島合戦(関102冷泉125・126、関168池永3)
- 1543年(天文12)2月中旬 大内義隆、京羅木山へ山陣(「二宮覚書」)
- 3月14日 菅谷口合戦(関19・119・133・170内藤12)
- 4月12日 塩谷口合戦(毛利家文書、関15・78・93)
- 4月30日 中郡13人の国衆 尼子方へ転じる(「二宮覚書」)
- 5月7日 防州衆敗軍(「房頭覚書」)

⇒大内義隆が、安芸武田氏滅亡後1年以上安芸国へ在陣した理由は何か?

①安芸国内の平定

- ・安芸武田氏滅亡後の戦後処理の問題(『広島県史 中世 通史Ⅱ』)
- ・平賀興貞勢力の掃討や戦後処理(初渡集)

②伊予国の情勢 伊予国守護河野通直の存在が背後の脅威となる可能性

- ・1541年6月～7月 大内氏警固衆の活発な軍事行動(白井文書)
- ・安芸国における反大内方勢力の崩壊

⇒「天文伊予の乱」 =河野氏の内部抗争 →河野晴通(通直の子息)が実権掌握

③赤松氏分国の情勢

- ・播磨国 郡山合戦後に尼子氏退去、赤松晴政の国内統制は難航(『毛利家文書』290)
 - ・年未詳6月8日大内氏家臣連署書状(「石見牧家文書」)
- =1541年以降の大内氏は、赤松氏分国内の対立関係の解消にも心を配る必要性

④尼子氏の動向

- ・1541年4月 美作国西部に侵攻、備前国境周辺に在陣(『毛利家文書』1480)
- =尼子氏は河野氏や大内氏・赤松氏・山名氏の動向を睨み、態勢の立て直しを図る

⑤北部九州の少弐氏の動向

- ・筑前国での復権をめざす少弐氏の動向はなお予断を許さない(「松浦家文書」)

⑥南九州・琉球王国との関係

- ・「南海路」を介した琉球・東アジアとの貿易ルートの動揺(←「倭寇」の活発化)
- ・1542年、協力関係にあった種子島氏との良好な関係が崩れる(「中川文書」)

⑦畿内政権との密接な関連性

- ・足利義晴 1541年末に尼子詮久へ偏諱を与え、1542年には河野氏内訌を調停
- ・細川晴元 対立する細川氏綱と結ぶ尼子氏をすでに敵対視

しかし、大内氏と強く結束していたわけでもなかった

→毛利元就、郡山合戦直後から尼子氏包圍網形成を働きかける(『毛利家文書』290)

(大内氏・足利義晴・細川晴元・山名祐豊・六角定頼・土佐一条房冬・赤松晴政ら)

⇒1543年初頭 足利義晴・細川晴元が尼子氏「退治」を表明(『関関録』121周布)

←安芸国・伊予国をはじめとする反大内方諸勢力を制圧

小笠原氏の服属、多賀美作守を介した出雲国衆の調略の成功、大内氏の優勢

おわりに

◎大内義隆による遠征事業とその挫折

- ・大内氏が遠征の目的を達するために直面した課題は、尼子氏・小笠原氏の動向はもとより、安芸国・伊予国をはじめ、畿内政権や赤松氏・山名氏・北部九州・南海路に至るまで、西日本全域を超えるような広範囲におよぶきわめて多岐にわたるもの
 - ＝大内義隆の安芸・出雲への滞陣は、西日本から畿内にわたるきわめて広範囲の諸勢力を不可分に巻き込む形で展開する、壮大な営みの過程
 - ＝尼子氏との戦争 というとらえ方だけでは到底理解できない
- ・大内氏は、尼子氏の背後に潜在した反大内方諸勢力の連携の復活により大敗
 - ＝大内氏の影響力の大きさと時代の変化をうかがわせている
 - その背景には、東アジア海域の変動もさまざまな影響を及ぼしたと考えられる

◎統合へ向けた胎動の時代

1500～1530 年頃 分裂・抗争が共時的に極度に進行

1530～1540 年代 広域的な緩やかな自立的連携が形成される段階

＝広範囲の多様な諸勢力が連携を模索して新たな対立軸を形成

⇒大内義隆の積極的働きかけによって拡大していった大内氏支持勢力

大内義隆や細川晴元に対抗する諸勢力を糾合する受け皿となった尼子氏

この両者が相拮抗し、西日本の広い範囲に影響を及ぼした時代

1540 年代以降 各地の諸勢力がそれぞれ拡大をめざす時代へ

⇒16c 後半の大規模戦争と統合の時代へ

参考文献一覧

- 福尾猛市郎『人物叢書 大内義隆』（吉川弘文館、1959年）
岸田裕之『大名領国の構成的展開』（吉川弘文館、1983年）
河合正治『安芸毛利一族』（新人物往来社、1984年）
米原正義編『大内義隆のすべて』（新人物往来社、1988年）
秋山伸隆『戦国大名毛利氏の研究』（吉川弘文館、1998年）
長谷川博史『戦国大名尼子氏の研究』（吉川弘文館、2000年）
小谷利明『畿内戦国期守護と地域社会』（清文堂出版、2003年）
川岡勉『中世の地域権力と西国社会』（清文堂出版、2006年）
弓倉弘年『中世後期畿内近国守護の研究』（清文堂出版、2006年）
山本浩樹『戦争の日本史 12 西国の戦国合戦』（吉川弘文館、2007年）
岸田裕之編『毛利元就と地域社会』中国新聞社、2007年）
岡村吉彦『鳥取県史ブックレット4 尼子氏と戦国時代の鳥取』（鳥取県、2009年）
河村昭一『安芸武田氏』（戒光祥出版、2010年）
市村高男編『中世土佐の世界と一条氏』（高志書院、2010年）
松岡久人著・岸田裕之編『大内氏の研究』（清文堂出版、2011年）
鹿毛敏夫編『大内と大友』（勉誠出版、2012年）
岸田裕之『毛利元就』（ミネルヴァ書房、2014年）
藤井崇『大内義興一西国の「覇者」の誕生』（戒光祥出版、2014年）
山内治朋編『論集戦国大名と国衆 18 伊予河野氏』（岩田書院、2015年）
山内譲『瀬戸内の海賊 村上武吉の戦い』（新潮選書、2015年）
山田康弘『足利義植一戦国に生きた不屈の大將軍』（戒光祥出版、2016年）
新名一仁『島津貴久一戦国大名島津氏の誕生』（戒光祥出版、2017年）
伊藤幸司編『大内氏の世界をさぐる』（勉誠出版、2019年）
黒嶋敏編『戦国合戦〈大敗〉の歴史学』（山川出版社、2019年）
長谷川博史『列島の戦国史 3 大内氏の興亡と西日本社会』（吉川弘文館、2020年）